

自閉症スペクトラム障害へのWISC-IVの臨床的活用

木谷 秀勝

Clinical Application for WISC-IV with Autism Spectrum Disorder

KIYA Hidekatsu

(Received January 5, 2017)

キーワード：WISC-IV、自閉症スペクトラム障害、DSM-5、社会適応

1. 目的

WISC-IV知能検査が、2010年にWISC-III知能検査から改訂されて、現在様々な臨床場面で活用されている。最新の知見から構成されているWISC-IVは、確かに被検査児の多層的な特性や支援の方向性を明確にする可能性が高い心理アセスメントとしての手ごたえは感じられる。その一方で、WISC-IIIに慣れた検査者にとっては、もう一つ使い勝手がしっくりこないという印象を聞くことも多い。

WISC-IVに改訂されて6年目が過ぎ、筆者達の研究グループが臨床的活用を通して実感してきたWISC-IVの可能性や限界に関して、報告を行うことを目的とする。特に本報告では、自閉症スペクトラム障害（以下、Autism Spectrum Disorder：ASD）を中心にした事例報告を通して検討する。

なお、WISC-IVの場合は、著作権の問題もあり、実際の検査結果に関しては、各項目の評価点は点数で示し、合成得点指標のみ図で表記することとする。

2. WISC-IVの理論的背景

WISC-IVへの改訂に伴い、「理論・解釈マニュアル（日本版WISC-IV刊行委員会，2010）」や「WISC-IVの臨床的利用と解釈（Prifitera, A. et al., 2012）」に基本的な理論的背景が英語版に基づいて詳細に記載されている。

ところが、現実的に臨床場面で活用する場合には、元々の理論との整合性が一致しない事例に遭遇することは確かである。また、WISC-IIIでも見られたが、理論的には理解できるが、実際に検査結果を被検査児やその家族にフィードバックする場合に、機械的な解釈と受け止められるリスクがあり、もっと実際の支援に援用できるように工夫する必要性を痛感してきた。

そこで、今回の報告では、われわれの研究グループが実際の臨床現場に活用するために工夫してきた基本的な視点を最初に報告する。

2-1 それぞれの合成得点をもつ臨床的意義

WISC-IIIまでの言語性IQ、動作性IQ、そして全検査IQのバランスから能力の安定感を測定する考え方から、WISC-IVでは、表1に示す4つの合成得点指標（従来のIQの視点と類似しているが）である言語理解指標・知覚推理指標・ワーキングメモリー指標・処理速度指標の指標パターン（WISC-IIIまでのプロフィール表）を中心において、被検査児個々の特性を理解することが重要視されている（上野他，2015）。

2-2 IQ重視から特性重視への変更

WISC-IIIまでのIQ重視の視点から、それぞれの合成得点指標パターンの解釈を重視した「特性重視」の視点へと転換がなされたことは画期的である。しかも、こうしたIQ重視から特性重視への視点の変更は、

WISC-IVだけの問題ではない。

表 1 WISC-IVの4つの合成得点指標

合成得点指標	臨床的な意味
言語理解指標 (VCI : Verbal Comprehension Index)	子ども達が、「どうすれば、難しくなった課題で、わからなくなった時に先生にきちんと聞くことができるか」。従来のVIQと同じ
知覚推理指標 (PRI : Perceptual Reasoning Index)	子ども達が、「課題に関心・意欲を持ちながら、最後まで集中しながら達成できるか」。従来のPIQと同じ
ワーキングメモリー指標 (WMI : Working Memory Index)	子ども達が、「どうすれば、素早く、優先順位をつけながら、課題ができるか」。予測しながらの問題解決能力
処理速度指標 (PSI : Processing Speed Index)	子ども達が、「どうすれば、今やっていることをすばやく終わらせて、自分の時間を作ることができるか」。器用さ（迅速・正確・一定）

2013年に改訂されたDSM-5において、従来の発達障害のカテゴリーが、新たに「神経発達障害」へと概念を含めて大幅な変更が進められた。筆者（木谷，印刷中）は、この「神経発達障害」への変更に関して、「（特に知的能力障害に関連して）IQの高低と同時に『個々が生活する環境において、どのくらい能動的に学業・生活・就労・社会参加などを日々営んでいるか』を基準とする適応行動の質的評価（QOL）を重視する方向への転換である」と述べている。同時に、WISC-IIIまで重視されていたIQに関しても、「初めての場面で、初めての検査者と、初めての課題という環境において、一人でどのくらいの能力を発揮できるかを測定する」社会性の基礎的能力だと筆者は考えてきた（木谷，2013）。

こうしたIQ重視から特性重視への変更と同時に、表2に示したように、WISC-IVでは、結果の解釈だけでなく、フィードバックの方向性そのものが大きく改訂されていることがわかる。

表 2 WISC-IVから見えてくる新たな解釈の方向性

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① IQ重視から特性重視へ ② 障害像の把握から支援の進め方へ ③ 「障害だからできない」から「どうしたらできるか」へ ④ 「学校や職場で適応できるように」から「家庭や地域で楽しく生活できる」へ ⑤ 「私」から「私たち」へ |
|---|

2-3 「ASDが本当に困っていること」をフィードバックするために

このフィードバックの問題は、特にWISC-IVになってから、検査者には大きな関門となっている。ところが、先の筆者の視点からWISC-IVの結果を精査して、さらに表2の視点と次に示す視点を援用することによって、フィードバックは進めやすくなると考えている。

筆者（木谷，2017）は「神経発達障害者が抱える本質的な障害」について、「当事者は、発達障害で困っているのではなく、自分の特性をどのように表現すればいいか困っている」と考えている。したがって、その「困っている」心理的背景について、4つの合成得点指標だけでなく、各検査項目間の差異を詳細に分析しながら、さらに実際の各項目への言語的応答の特徴や課題の遂行状況を詳細に分析する作業を通して、個別に実施することが重要だと判断している。

2-4 社会適応の基準の変更

こうした特性重視への視点の変更が行われた背景を考える場合、もっとも基本的な視点はWHOが定める健康の定義にたどり着く。その健康の定義を筆者なりに簡潔に整理すると次の3点に集約できる。「能動性」、

「『自分らしさ』が表現できる活動への参加」、そして「Positive心理学の視点である、『喜び』、『充実』、『達成感』などの体験」である。つまり、単にADLが自立して、周囲に合わせながら問題なく一緒に生活ができて、(問題行動のない)穏やかな人間関係を営むことができればいいといった受け身的考えではなく、より主体的に、自己実現に近づけることができるように、当事者ニーズに照らし合わせながら支援や「自分らしさ」が発揮できる環境や表現ツールを検討する時代になっている。

実際に、辻井はこうした適応行動の重要性から、最近日本版が開発されている新たな心理アセスメントであるVineland-II (辻井・村上監修, 2014) やSP感覚プロファイル (辻井監修, 2015) などを通して、こうした視点を基本とした新たな適応行動レベルの測定とそこからの支援を検討している。

こうした特性重視の視点は同時に、従来の遺伝的素因から環境的要因を探察する視点に切り換える力量が、検査者に求められる時代を迎えている。実際、WISC-IVでは、「ワーキングメモリー」と「処理速度」の2つの指標が、「学習し、絶えず変化する環境に適応する能力」(Priftera, A. et al., 2012) と指摘されている。同時に、「児童の正常な発達に伴う処理速度の迅速化が、ワーキングメモリー容量のより効率的な利用につながり、それによって多くの推理課題における検査結果が向上」する可能性をもつ。その一方で、こうした適切な環境下での支援が欠如または不十分な場合には、「迅速な情報処理が妨害され、それがワーキングメモリー構造に負担をかけ、その結果、児童の理解力や新規学習能力が減少してしまう可能性」としてASDを初めとする多くの神経発達障害児にさまざまなリスクが生じることは十分に予測される。特に、多くのASDに併存している感覚障害の場合、こうしたリスクが日常的に見られることから、筆者(木谷, 2016a) が指摘するように「日常生活でもっとも疲れやすく、その結果、学校や職場ではさらに疲労している」状態が慢性的に生じている。

したがって、こうした日常生活からの物理的・人的刺激などの環境要因の調整を、WISC-IVの結果を通して行い、その安定感の上で社会活動への参加意欲が能動的に高まるように支援する方向性が必要である。具体的には、さらなる自己実現のために個々の障害特性を配慮した学習支援を「言語理解」と「知覚推理」の結果を基にしながら検討を進めることが、長期的な意味での安定した社会適応を高めるために重要になってくる。

3. WISC-IVの臨床的活用—ASDの事例を中心に

WISC-IVをASDに適用する場合、DSM-5の診断基準では、従来のカナータイプやアスペルガータイプを同一基準として検討しているが、臨床的、あるいは実際の日常生活や学校生活での支援においては、支援の方向性や環境の構造化の点では異なってくることは確かである。しかも、そこにADHDの併存が見られる場合は、さらに詳細な検討を要する。

したがって、今回の報告においては、順にASD(カナータイプ)、ASD(アスペルガータイプ)、ASD(ADHDの併存)の3つの合成得点指標のパターンを提示したい。次に、ASDに生じやすい二次障害への理解のために、感覚障害(過敏)を併存するASDの合成得点指標のパターンを提示する。

なお、それぞれの事例については、合成得点指標を図で示すが、支援の方向性を明確にするために、言語理解(VCI)、知覚推理(PRI)、ワーキングメモリー(WMI)、処理速度(PSI)の計10項目の基本項目の評価点も数値で示す。

同時に、ASDの典型的な指標パターンを提示する目的からも、今回提示する事例は、高機能群を対象とする。なお、事例提示にあたっては、検査段階あるいは調査段階で保護者からの同意を得ており、個人が特定されないように、事実関係に関しては、支障がない範囲内で修正を施していることを追記しておく。

3-1 事例1: ASD(カナータイプ)の12歳男児

小学校入学後に、こだわりの強さと受け身的な対人関係が目立つようになり、来談する。当時は、高機能自閉症の診断となり、投薬はなく、それまでの通常学級で特別支援体制を維持しながら、視覚優位な特性から周囲を模倣しながら受け身的ながらもなんとか適応してきた。しかしながら、高学年になり、抽象的な概念学習や自分の意見を整理しながら発表することへの困難さが強くなった時点でWISC-IVを実施した。

それぞれの評価点は、言語理解【類似=7、単語=7、理解=7】、知覚推理【積木模様=15、絵の概念=12、行列推理=11】、ワーキングメモリー【数唱=5、語音整列=8】、処理速度【符号=15、記号探

し=13】となり、合成得点プロフィールは、図1に示したように、VCIとWMIが低く、PRIとPSIが高いプロフィール特徴を示した。これは、上野他（2015）では、パターン⑧：視覚処理優位型（N型）に相当する。

以上のことからわかるように、この事例の場合、視覚情報を中心とした支援を継続することによって、授業中のノート整理がどのくらい正確（多少の間違ひは問題としない）にできているかで、自己肯定感の高さを評価することができた。それでも、VCIの特徴から中学校での学習内容への理解には限界があるため、校内通級制度を活用することで、WMIの低さから来る不注意のリスクも最小限にすることができた。現在は、高校に進学して、受け身ながらも就労に向けて学校生活を維持している。

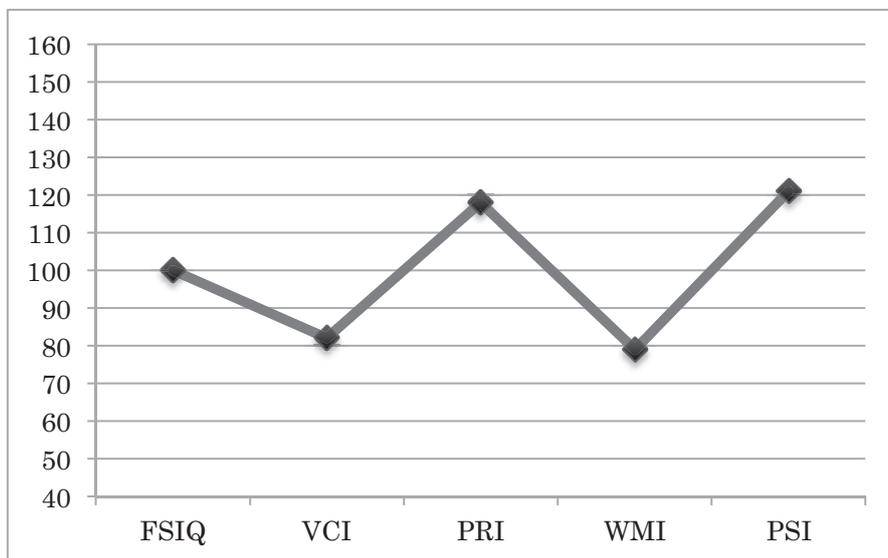


図1 ASD（カナータイプ）

3-2 事例2：ASD（アスペルガータイプ）小学5年生の女兒

小学校入学後、学級内で物がなくなることが続き、なぜか、この児童が「ありました」と担任に知らせに来ることが続いた。しかしながら、この児童が取った形跡がまったくなく、逆に、国語の授業では他の児童が驚くくらいの独特な視点から発表することが多く、周囲から一目置かれている存在であった。それでも、同じエピソードが続き、マイペースさが気になったこともあり、担任から家族に話があり、家族もびっくりして来談に至る。生育歴などからも、当時はアスペルガー症候群と判断され、同時にWISC-IVを実施した。

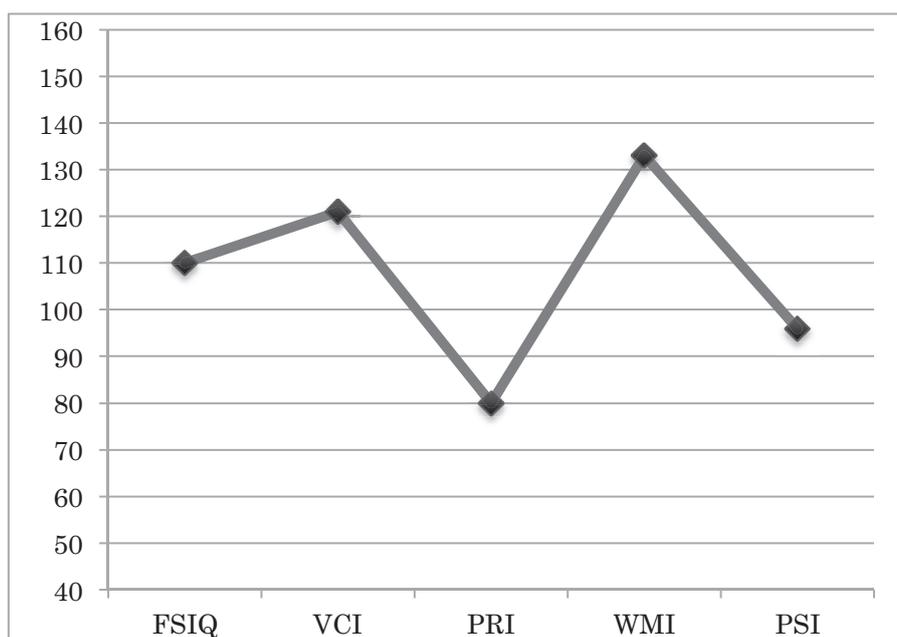


図2 ASD（アスペルガータイプ）

それぞれの評価点は、言語理解【類似=12、単語=15、理解=14】、知覚推理【積木模様=6、絵の概念=9、行列推理=9】、ワーキングメモリー【数唱=14、語音整列=18】、処理速度【符号=10、記号探し=9】となり、合成得点プロフィールは、図2に示したように、VCIとWMIが高く、PRIとPSIが低いプロフィール特徴を示した。これは、上野他(2015)では、パターン⑦：聴覚処理優位型(逆N型)に相当する。

以上のことからわかるように、アスペルガーの女兒に特徴的に見られる、どこかおっとりとしているが、周囲から見ると、びっくりするような発言(場の雰囲気を読んでいない、あるいは、本音を思わず口にするなど)が目立ってしまう。ところが、本人自身は気づいていないことも多く、同時に高学年になると算数の図形処理や社会の資料の活用が苦手になってくる傾向(不器用さも合わせて)が強くなるので、小学3年で診断告知を行った。その結果、中学校では合唱部に入り、パートリーダーとして活躍している。

3-3 事例3：ASD (ADHDの併存)の小学5年生男児

小学校入学後、多動と不注意が目立つ一方で、他児との距離が取れない、声がいつも甲高い、自分の好きな授業になると一方的な発言が目立つなどの問題から、来談する。診断では、当時は高機能自閉症とADHDの併存が認められて、ADHDをコントロールする投薬が処方されて、成長とともに多動と不注意は改善されてきた。その経過で、WISC-IVを実施した。

それぞれの評価点は、言語理解【類似=5、単語=8、理解=9】、知覚推理【積木模様=8、絵の概念=10、行列推理=7】、ワーキングメモリー【数唱=4、語音整列=8】、処理速度【符号=5、記号探し=6】となり、合成得点プロフィールは、図3に示したように、VCIとPRIが高く、WMIとPSIが低いプロフィール特徴を示した。これは、上野他(2015)では、パターン⑪：GAI優位型に類似する。

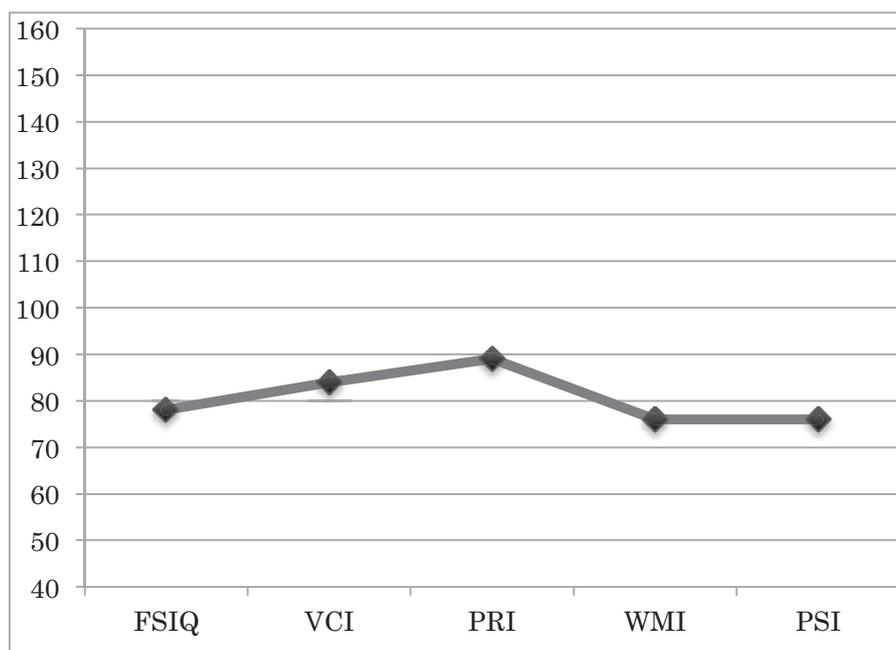


図3 ASD (ADHDの併存)

以上のことからわかるように、また、パターン⑪の特徴から、ADHDの特性が強く見られる認知特性をもっている。したがって、投薬も処方されている。ところが、WISC-IVのプロフィールをみても、パターン⑪のプロフィールが明確になるくらいの各指標の差異は大きくなっていない。この点からも、投薬の効果が出ていると推測される。中学校でも、同じような支援体制が維持されており、その結果、中学2年時で実施したWISC-IVでは、VCIがさらに伸びており、支援の成果として、自分が困っていることをきちんと教師に伝えることが上手くなっていると報告を聞いている。

3-4 事例4：感覚障害（過敏）の中学1年の男児

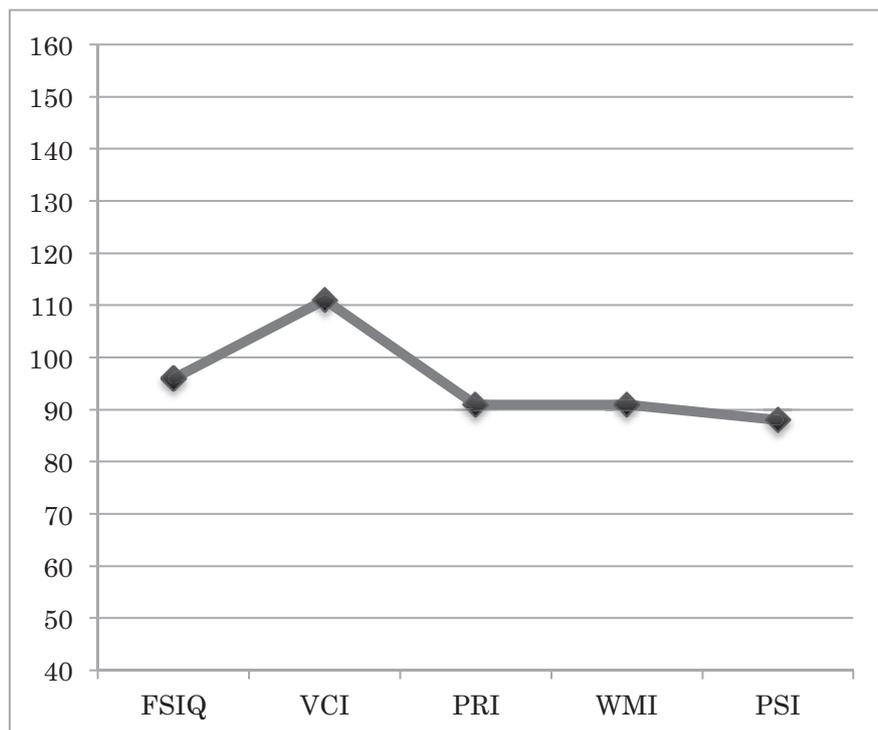


図4 感覚障害（過敏）のあるASD

幼少時期から音への敏感さが強く、睡眠が浅い状態が続いていた。幼稚園以降、偏食の問題、制服のタグがチクチクするなど、感覚障害が顕著に見られた。それでも、小学校では支援学級（自閉・情緒）で環境調整を行うことで、成長とともに安定感が見られてきた。ところが、中学校に進学後、支援学級での配慮は続いたが、学校自体がひどく荒れていたために、絶えず大きな物音や教師の叱り声が響く校内環境に、がまんすることができなくなり、不登校傾向となり、来談に至り、WISC-IVを実施した。

それぞれの評価点は、言語理解【類似＝16、単語＝12、理解＝8】、知覚推理【積木模様＝7、絵の概念＝9、行列推理＝10】、ワーキングメモリー【数唱＝11、語音整列＝6】、処理速度【符号＝7、記号探し＝9】となり、合成得点プロフィールは、図4に示したように、VCIだけが高く、PRIとWMIとPSIが低いプロフィール特徴を示した。これは、上野他（2015）では、パターン①：VCI高型に相当する。

以上のことからわかるように、周囲からの聴覚過敏についてはノイズキャンセリング機能のヘッドフォンを活用した。それでも、心身の変化が大きい思春期だけに、疲れがひどくなる午後は早退することにして、PSIの低下からくる自己肯定感の維持を図ることにした。同時に、週に一度地域の陶芸教室に通い、陶芸という自分の好きな世界に注意を向けながら、創造活動を通したきめ細かい作業（敏感さの裏腹の世界）から自己肯定感を高めることに注意の方向性を切り替えた。その結果、陶芸教室に通うことを楽しみにすることでバスでの移動や雑踏の騒々しさを耐えることが少しずつできるようになった。

4. 考察

以上のWISC-IVの結果から理解できる4事例の支援の方向性から、改めて、WISC-IVがもつ臨床的活用への可能性と限界について検討してみたい。

4-1 WISC-IVがもつ臨床的活用への可能性

このWISC-IVがもつ可能性に関して、本論文では2つの視点から整理したい。

4-1-1 WISC-IVから理解できる環境要因の重要性

実際にWISC-IVを実施して感じることは、WMIとPSIがもつ「学習し、絶えず変化する環境に適応する能力」

の理解を十分に精査することである。この指摘は先に述べたDSM-5における適応行動の考え方と近いものであり、同時に個々が生活する環境に対する能動性の質が問われる指標もある。しかしながら、ここで注意しなければならないことがある。それは、事例1と2でわかるように、WMIとPSIが（ともに、あるいはどちらかが）高ければ、それだけさまざまな環境への適応が良好だとはけっして言えないことである。

むしろ、個々の能力のバランスを理解しながら、どうすれば自分の最適な環境を選択することができるかを予測（事例1）して、計画的に環境の変容を図りつつも、リスクがある場合には、迅速かつ正確に行動修正（つまり、器用さ）できるかが課題（事例4）になってくる。その意味では、筆者（木谷、2016b）が青年期ASDでの自己理解の重要性（事例2）を指摘しているが、そこにもつながってくる問題である。

4-1-2 WISC-IVから理解できる「流動性推論」の重要性

WISC-IIIからWISC-IVへ改訂された際に、もっとも重要な因子が「流動性推論（Floating Reasoning）」である。簡単にいえば、「非言語的な推論能力として、洞察力や基礎知識の応用力、直観的思考力などを含む」ものであり、「社会的場面における状況判断」に関連する（大六、2015）。こうした能力は主にPRIの指標から把握できる。

確かに、WISC-IIIで検討される言語性・動作性のそれぞれのIQの場合よりも、社会的自立に不可欠な流動性推論の特徴を強調する意味は実感できる。したがってWISC-IIIまでの全検査IQの考えから、WISC-IVでは「流動性推論」を含めた一般能力指標（GAI：General Ability Index）が、個々の「一般的な能力の程度の予測」として有効であり、「児童の総合的な知能の得点として最適かつ臨床的に適切」（Prifitera, A. et al., 2012）と判断される背景として、この流動性推論がもつ比重が大きいことは確かである。

実際に、PRIが低い事例2では、本人の特性を周囲に理解してもらうだけでなく、告知を通して、自己理解を促す支援を行っている。また、事例3では、ADHDを併存することもあり、投薬コントロールによるPRIの安定化が効果を奏していると考えている。

4-1-3 適切な環境から派生する（社会的）適応行動の発達

以上のように、WISC-IVがもつ2つの可能性は、それぞれが別々のものではなく、それぞれの合成得点指標が複雑に関与しているように、この2つの可能性も相互関係が見られる。特に、新奇な環境要因や臨機応変さが求められる環境（学校や職場）において適応に困難さを持つASDの場合（事例4）には、こうした環境的リスクが高い状態が継続すると、問題解決への予測の困難さや問題への処理能力の不器用さから自己肯定感が低下しやすく、また心身の疲労度が高まりやすくなる。同時に不器用さが顕著な場合（事例2と3）には、その疲労自体を的確に把握できないこともあり、ますます悪循環のループに落ち込みやすい。その結果として、集団場面では「自分が困っている」状態を的確に表現できないだけでなく、流動性推論の低下に伴い、自分の世界へのひきこもりやこだわり行動などが強化される。さらに、こうした事態が強化されることで、結果的に二次障害が派生することは容易に想像できる。

逆に見れば、環境要因に対する的確な支援を継続することにより、「自分が困っている」事態への表現や状況判断も向上することが促進（事例1と3）される。したがって、本来の合成得点指標だけでなく、それぞれの項目の評価点や解答内容の詳細な検討を進めることで、さらに適切な支援を充実させる可能性が高くなると考えている。

4-2 WISC-IVを実施する場合の注意点

実際に、多くの児童（定型発達を含む）にWISC-IVを実施してわかる注意点は、次の3点である。

4-2-1 対象年齢の問題

WISC-IVの適用年齢は、5:0から適用可能となっている。ところが、実際にWISC-IVを実施してわかることは、幼児期や小学校の低学年には、言語での教示の多さや全体の課題数の多さから負担がかかり、PSIのプロフィールが右下がり、つまり後半での疲労が強化されやすい印象を受けている。

同時に、WISC-IVで強調されている流動性推論や安定した情報コントロールが前頭前野で機能するようになる9・10歳以降で適用するほうが、結果の分析や支援の進め方も機能すると考えている。

視点を変えれば、WISC-IIIが時代遅れ（実際には、まだまだ多くの臨床現場で活用されている）になった

わけではなく、検査を受ける児童の生活・精神年齢によって、検査者側が十分に配慮することで、最終的には検査を受ける児童への負担の軽減と有効な支援が進められると考えている。

4-2-2 視覚過敏のある児童への適用の問題

WISC-IIIとWISC-IVを比較してわかることは、WISC-IVのほうが全体として色彩が強い印象を受ける。しかも、第1課題である「積木模様」の提示用カードだけでなく、積木自体の赤色も強い。そのために、10歳以降で視覚優位な児童、あるいは視覚過敏がある児童では、「積木模様」そのものは能力に応じて課題遂行できても、「数唱」あたりから反応が不安定（特に、逆唱課題）になる場合が見られる。こうした視覚過敏の遅延反応が続くと、最終的には、検査が終わった段階で、「今日もできなかった」と自己肯定感の低下が生じるリスクも懸念される。

その点、WISC-IIIでは全体がパステル調の色彩が多いので、筆者は二次障害を抱える視覚過敏の児童の場合は、可能な限りWISC-IIIを実施することになっている。

4-2-3 WMIの限界

WISC-IVのWMIの項目としては、「数唱」、「語音整列」、「算数」の3つの下位項目で構成される。ところが、この3つの課題に共通する課題の情報処理は聴覚-認知系の情報処理であり、しばしば学校関係で要請がある視-知覚運動系のワーキングメモリーやプランニングなどの学習そのものの情報処理能力を精査する場合（特に、限局性学習障害など）には、十分な情報を得ることができない場合も多い。

もちろん、視-知覚運動系のワーキングメモリーは不器用さとも関連するので、PSIとの関連も参考にしているが、実際の学習場面での基礎から応用へ、あるいは課題の処理パターンの得意・不得意（たとえば、同時処理や継時処理など）を検討する場合、結果的には、テストバッテリーとして、K-ABC-IIやDN-CASも同時に実施することが必要になり、検査を受ける児童への負担が増加される懸念が生じる。

まとめにかえて

本報告では、自験例を再構成しながら、WISC-IVを臨床的に活用する場合の特徴について考察を進めた。特にASDに関しては、筆者が長年関与しているだけに、WISC-IVを実際の生活場面や学校場面での支援に結び付けやすい利点もあり、ASDの事例を中心に検討した。

したがって、WISC-IVがもつさらなる可能性を検討するためには、神経発達障害だけでなく、さまざまなニーズをもつ児童への適用を通して検討する必要がある。

付記

今回の報告は、平成28年度科学研究費補助金（基盤研究（C））、課題番号：16K04366、研究代表者：木谷秀勝）の成果報告の一部である。

今回の報告は、平成28年度までに筆者らが九州地区で継続的に実施しているウェクスラー式知能検査の研修会での成果をまとめた内容である。各地区の世話人である山口県の山口真理子先生、福岡県の中並朋晶先生、飯田潤子先生、山崎真由子先生、碓さとし先生、佐賀県の山辺真紀先生、豊丹生啓子先生、大分県の谷川真美先生、岡田知也先生、長崎県の大村共立病院心理療法士室の臨床心理士の先生方、宮崎県の田原きみ子先生、尾之上さやか先生、鹿児島島の取違智美先生に感謝申し上げます。

文献

大六一志（2015）：知的水準・認知特徴のアセスメント。黒田美保編著。これからの発達障害のアセスメントー支援の一步となるために、39-47。金子書房。

木谷秀勝（2013）：子どもの発達支援と心理アセスメントー自閉症スペクトラムの「心の世界」を理解する。金子書房。

木谷秀勝（2016a）：敏感すぎる子の豊かな感受性を育むー創造活動を通して。児童心理「特集：敏感すぎ

- る子」, No. 1017, 89-93. 金子書房.
- 木谷秀勝 (2016b) : 青年期の高機能ASDへの支援—「自己理解」を中心に. 日本児童青年精神医学とその近接領域, Vol. 57, No. 4, 43-47.
- 木谷秀勝 (2017) : 福祉における実践: 自閉症スペクトラム障害児者への支援を中心に. 祖父江典人・細澤仁編. 日常臨床に活かす精神分析. 誠信書房.
- 日本版WISC-IV刊行委員会訳編 (2010) : 日本版WISC-IV理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.
- Prifitera, A., Saklofske, D. H. & Weiss, L. G. (2012) : 上野一彦監訳. WISC-IVの臨床的利用と解釈. 日本文化科学社.
- 辻井正次・村上隆日本版監修 (2014) : Vineland-II適応行動尺度. 日本文化科学社.
- 辻井正次日本版監修 (2015) : SP感覚プロフィール. 日本文化科学社.
- 上野一彦・松田修・小林玄・木下智子 (2015) : 日本版WISC-IVによる発達障害のアセスメント—代表的な指標パターンの解釈と事例紹介. 日本文化科学社.